

# 情報理論とその応用学会ニューズレター

## 新しい学会の発足

会長 滑川 敏彦  
(摂南大)

学会の創設と言えば少しオーバーな表現になると思います。情報理論とその応用学会はいわばミニ学会として、昭和61年1月に新しい発足をいたしました。

昭和60年12月の情報理論とその応用研究会総会において、出席会員の諸君の御意見をお伺いし、その多数の方々の御賛同を得て作られた新学会であります。

情報理論とその応用研究会はかねてから、学会化の準備のために委員会を設けてその検討を重ねて来ました。学会化準備委員会主査の有本先生はじめ委員の方々により方向付けが固められ、原島先生はじめ関係委員の手になる会則も制定されました。

有志の懇談会形式から始められた研究会は昭和53年以来の歴史の上に、新しい発展に備える体制作りが行われ、学会としてその運営が組織化されたのであります。

学会の行事としては、研究会の良さを残しながらも、年次大会に当たる年一回のシンポジウムの形式を整え、新しい企画運営が期待されるものが中心となると考えております。

学会のニューズレターもこれを拡充させ、できるだけ広く会員諸氏の声を反映させたものにしたいと考えております。

学会として新発足の初めてになる第9回のシンポジウムは、長岡技術科学大学の丸林先生が実行委員長として企画運営に当たられ、昭和61年10月29日～31日、赤倉のホテル太閤で開催される予定です。

1988年6月に日本で開催されるISITは、会場として京都国際会議を予約し、組織委員会が、電子通信学会の承認のもとに結成されたところです。

以上、簡単乍ら、御挨拶に代えて御報告いたしました。

## 理事から一言

「学会」という同好会がいい

副会長 堀内 和夫  
(早大)

学問と言うものは、好きでないと、トコトンまで突っ込んで勉強できるものでない。好きな学問でも、一人でやっていると、楽しい演劇を一人でみているようなもので、物足りないものである。楽しみは、仲間同志寄り集まって、共に顔合わせたいものである。今回、縁あって、この研究会が、くつろいだ普段着姿だけの集まりから、背広姿も似合うような「学会」としての形を整えたことに、リクルートスタイルで一人前の形を整えたばかりの学生のような新鮮さを感じるのは、矢張り身びいきのせいだろうか。

それにつけても、情報理論という学問が好きで、物好きにも寄り集まっていた仲間たちが、学会スタイルに気を奪われて、同好会として楽しんでいたころのナマの姿を、たとえ僅かでも損なわないようにしたいものである。

「学会」は同好会なのである。

「情報理論とその応用研究会」と  
シンポジウムの関係

無任所理事 有本 卓  
(阪大)

情報理論とその応用シンポジウムは、本年10月に、第9回を迎えようとしている。シンポジウムの精神と運営そのものは従来変わるところはないだろうが、主催の方法と会告の方法などが学会化の移行に伴って若干異なることになるので、ここに従来方式との差異

について説明するとともに、学会化に至った経緯について触れておく。

事の起こりは第7回シンポジウム(1984年11月、於鬼怒川)にさかのぼる。シンポジウムの企画と実行を司る実行委員会は、毎年、開催場所に応じて組織されていたが、同好の集まりであったが故に事務組織が弱体であり、シンポジウムの継続性にいくつかの危惧が見て取れるようになった。この指摘を受けて組織強化検討委員会を発足させ、同会から「ミニ学会化を含む組織強化について」と題する答申が理事会に出されたのが第7回シンポジウムの開催直前であった。この答申案はそのシンポジウムで開かれた総会でも概ねの賛同を得て、その後「学会化準備組織委員」とその下部組織として「学会化準備委員会」を発足させ、これらの委員会で討議させた結果に基づいて、第8回シンポジウム時の総会で学会化が承認され、本年1月より本会が発足を見ることになったのである。これらの事情と経緯は第8回シンポジウム時に配布された資料に詳しいので、ここではこれ以上の詳細には触れないが、学会とシンポジウムの関係についてだけざっと説明しておこう。

学会化の移行に伴って問題となるのは、会員資格によるシンポジウム参加条件の差異の問題であった。結局、本シンポジウムは独立採算制とし、会員資格の関係なしに参加し、研究発表できることになった。また、第9回シンポジウムから、シンポジウムそのものは「情報理論とその応用研究会」、「電子通信学会情報理論研究専門委員会」、「IEEE IT Group.Tokyo Chapter」の共催となる。ただシンポジウムの会告案内は、ニューズレターと共に、本会員個々に直接送られるものとして、従って、会費は通信の経費をカバーする程度とし、こうして会費徴収は原則としてシンポジウム会期中に行うことになると思う。

ところで、上に述べたように、シンポジウムが三団体の共催となっても、実際の運営は実行委員会があたり、この実行委員会は本研究委員会の理事会からの要請に基づいて発足するので、本研究会がシンポジウム推進の母体であるとの認識には変わりがない。同好の志をもって参加した人たちが互いに連絡できる手段を恒常的に維持するのが本会の組織のミニマムの仕事であるが、現実にはシンポジウム、国際シンポジウム、各種ワークショップ、ニューズレターの発行、等の企画と実行

も課せられている。ここに、ボランティア精神に富んだ会員諸氏の協力が歓迎されるゆえんがある。

-----  
情報理論とその応用シンポジウムに思うこと

庶務理事 笠原 正雄  
(阪大)

昭和52年3月の大学入試は、学園紛争の影響が未だ尾を引き、各大学では程度の差こそあれ、警備を厳重に実施していた。この年、小生に割り当てられた入試監督の役目は屋外の警備であったが、入試当日は3月初旬にはめずらしく、寒波の影響で一日中猛烈な吹雪であった。吹雪の中に丸一日立ちつくすと、身体が完全に冷えきってしまい、帰宅後あつい湯舟に30分以上つかってみても、なお身体は骨の髄まで冷えきり、どうすることもできなかったことが思い出される。さて、この雪の中で警備のさなか、基礎工学部の有本先生の研究室に在籍したことのあるM氏が近づいてきて、「有本先生が笠原さんに何かお話があるようですよ。」と話しかけてきたのである。一体、何の話だろう？ 吹雪の中に立ち尽くしつつ色々思いめぐらした末の最尤復号結果は“9月に米国で開催されるISITについての話”であった。この推定結果は見事な“復号誤り”に帰したのであったが、このM氏の伝言がきっかけとなって有本先生と何回か話をする機会をもつことになった。このときの話題が何であったかは、もはやさだかではないが、情報理論に関する討論の場が少ないことを嘆きあったように思う。このような話合いも一つのきっかけとなって昭和53年6月、滝、滑川、宮川、重井、嵩の諸先生方を理事とする強力なリーダーシップのもとに情報理論とその応用研究会の結成が全国の情報理論研究者に呼びかけられたのである。やがて、この呼びかけが神戸市北野町の六甲荘における第一回シンポジウム開催に結びついたのであった。第一回以後、恒例シンポジウムの直接の世話役は東の幹事である辻井、今井、原島、韓の諸氏、西の幹事である有本、平沢、杉山の諸氏と筆者であり、設立後の数年間は交互にシンポジウムの運営に当たった。当時、東西の幹事としての我々は現在より10才近くも若かったわけであり、ボランティア活動といたしながらも苦しさよりも、やりがいのよう

無 題

会計理事 杉山 康夫  
(撰南天)

昭和 53 年 11 月に、神戸で、産声をあげた情報理論とその応用研究会も、今年で 9 年目に入りました。神戸におけるシンポジウムでは参加者 88 人、発表件数 34 件であったものが、回を重ねるごとに増加の一途をたどり、奈良におけるシンポジウムでは、参加者 256 人、発表件数 145 件となりました。そして、1 つの転機として、“情報理論とその応用学会”へと名称変更が行なわれました。ミニ学会として小回りのきく、内容のある学会に育っていったらいいと思います。

私も、会計の方でお手伝いすることになっております。予算規模数十万円の貧乏学会です。すべての活動はボランティアが基本となると思います。宜しくお願い致します。

-----  
情報理論について思うこと

企画理事 今井 秀樹  
(横浜国大)

日頃、情報理論について講義もし、本も書いていながら、いざ、正面切って「情報」とは何かと問われると甚だ困ってしまいます。それは丁度「人間」とは何かと問われるのと同じようなものだからです。もちろん、古典的情報理論における「情報」は、一面から見ればきちんとした意味を持っていますが、これからの情報理論では、情報をもっと多くの面から捉えていかねばならない、そうでなければ、今後の情報理論の発展は望めないし、その応用も限られたものになるのではないかと、そう考えています。

情報理論とその応用学会の企画理事としては、情報理論の新しいフロンティアの開拓および情報理論の応用の拡大を図り得るような企画を立てたいと念じております。情報理論とその応用の今後の方向について、会員の皆様の御意見をお寄せいただければ幸いです。

なものを強く感じ、試行錯誤的にシンポジウムを運営してきたように思う。理事・幹事会を含め、あらゆる会合において常に和気あいあいとした楽しい雰囲気のもとに語り合うことができたことが何よりも心に残る楽しい思い出である。さて、西で開催を引き受けた年には、有本、平沢、杉山の諸氏と国道 171 号線（西国街道）沿いのファミリーレストランで夕食をとりつつ「実行委員会」を開催するのが通例であった。このために国道沿いにほぼ 300m おき位の間隔でオープンしているファミリーレストランは全て行き尽くし、そしてこれらのレストランのメニューもほとんど一通り食べつくしてしまったのではないかとさえ思われる。

ここ数年、シンポジウムは初期のころとは比較にならないほどスケールの大きくなり、運営方法もより組織的なものとなった。しかしながら、シンポジウム自体が 100% ボランティア活動に支えられているという点は全く変わっていない。このためシンポジウムを成功させるために人一倍、神経を使い、誠心誠意努力をしてみても、例えば予稿集が一時行方不明になったり、会議室が予定通りのスケジュールで借りられなかったり等々の大きなミスのほか、後で、はっと気付く程度の小さなミスが次ぎ次ぎ出てくるものである。

しかし、非常に幸いなことに、本シンポジウムには初期の頃から毎年熱心に参加されている常連の会員諸氏を中心とする参加者全員の暖かい精神的なバックアップがあることを忘れてはならないと思う。どんなミスでも参加者全員でチエを出し合って解決していこうというような雰囲気がこのシンポジウムには連綿として受け継がれているように感じるのである。

第 9 回のシンポジウムは今秋 10 月末に開催の予定であるが、長岡技術科学大学の諸先生を中心とする実行委員会の方々の肉体的、精神的な御苦勞はほとんど筆舌には尽くせないほど大きなものと伺い想像し、一会員として心より感謝する気持ちで一ぱいである。そして研究室周囲の若手研究者、大学院生の諸君とともに、初めて信州の地で開かれる第 9 回シンポジウムを何よりも楽しみにして待っている今日この頃である。

-----

## 確率過程とその応用研究会

企画理事 小倉 久直  
(京都工繊大)

情報理論とその応用学会と同じ語呂の名前の研究会が諸先生のお勧めもあり時限研究会として発足致しました。「確率過程」が数学会用語であるため「その応用」を付けねば恰好が付かないということもあるようです。これは本学会の子分のような研究会でありますのでこの場を借りてよろしくお願い致します。「確率過程」は情報理論の太柱の一つであるにも拘らず、情報理論の中でも工学の中でも居所が定まらず境界、周辺を彷徨している感じがしますが、それは情報・通信、制御、信号処理、システムはいうにおよばず機械、建築、土木、航空、原子核など工学の他分野、生物、農学、医学、物理、化学、天体・地球物理、経済などあらゆる分野に登場する文字通り interdisciplinary な問題でもあります。本学会の諸先生に一層の御関心をお寄せ願いたく思う次第です。

### 海外研究速報

#### ハンガリー、イタリア訪問記

庶務理事 平沢 茂一  
(早大)

はじめに

昨年 10 月より本年 2 月まで 4 ヶ月余り、早稲田大学在外研究員として、前半ハンガリー、後半イタリアを訪問した。経営工学の分野でも情報システムの持つ役割が次第に増加しつつある。今回は経営工学への応用を考慮した情報関連研究の調査が主たる目的であった。気候的に日本にもまして厳しかったが、秋から冬の落ち着いたヨーロッパを味わうことができた。

ハンガリー・ブダペスト

ブダペストは東欧で最も美しい町の一つとして知られている。4 年前学会で一週間程訪れたときより一段と美しく豊かになったように感じられた。東欧にあって最も西側に近いかけ橋という国柄、オーストリアへのビザは相互に不要である。また昔の枢軸国の名残りか、11 月 5 日からの開放記念日も大挙してオーストリアに車を連ねた、とテレビで報道し

ていた。もっとも、ソ連軍がハンガリーを開放したことを記念して特別なセレモニーを催す国ではない様な気もする。ユーゴスラビアに比べても気質は自由主義国に近いようである。ナイトクラブが朝の 4 時まで営業しているし、街角ではロックを歌い踊っているのを見かける。しかし、私達にとって日頃見かけない赤旗と大きな金の星印は不気味に感じる。

ブダペストでは、ハンガリー科学アカデミー数学研究所を訪問した。ここは数学を中心とするが情報関係の研究室もある。東欧の 4 人組として世界的にも有名な Drs. I. Ciszar, T. Nemetz, J. Korner, K. Marton (女性) が活躍している。あいにく Dr. Ciszar はアメリカ Maryland 大学を訪問中でクリスマスに帰国とのことで色々お世話になったのは Dr. Nemetz である。4 人の研究室は広くがらんとした殺風景な部屋で、机はそれぞれかってな方向を向いている。名誉にも筆者は留守中の Dr. Ciszar のデスクをお借りした。Dr. Nemetz は最近暗号に、Dr. Korner は Graph Entropy に、Dr. Marton は統計学のある証明問題にそれぞれ熱中していた。ここには何人かの学生がおり、毎週決まった時間に討論に来る。大学が出す学位は Small doctor (dr.) といい、研究所で出す Large doctor (Dr.) が本物だそうである。毎週木曜日午後のセミナーに参加させてもらったが皆大変がんばっていた。ただ筆者がいたばかりに英語でやってくれたが、それがどうやらブレーキになったらしい。物価は安く、西側からの訪問者にとっては大変楽である。コンサートはほぼ毎日催され、入場料が高くて 1000 円だから日本の比ではない。また普通のレストランではトカイワインが一本 600 円ぐらい、ステーキが 800 円ぐらいで結構美味しい。ただし高級なものは観光者向けのホテルやレストランにあり、西側に劣らずめっぽう高い。以前に比べクレジットカードも普及し、円が高くなったこともあり、カードで決済することが多かった。

イタリア・トリエステ

トリエステはアドリア海に面した人口 30 万人くらいの小さな田舎町である。急な斜面が多い自然の良港で知られている。冬は六甲おろしならぬオーストリア地方からの強烈な風に悩まされる。夏とちがいで、ここの冬は予想以上に厳しい。ISIT'79 は 6 月末すぐ隣町のグリギャーノで聞かれた。夏場はリゾートタウンで活気あるが、冬はひっそりとしずまりか

えっていた。

トリエステでは、トリエステ大学電気・電子・情報学科の Prof.G.Longo を訪問した。Prof. Longo は地味ではあるが西欧の実力者の一人として知られている。ハンガリーとも交流があり、Dr.Nemetz らによれば、彼の研究はすでに哲学の域に達しているとのことであった。言語や人工知能にも興味を持ち、又地元ウディネにある研究所の要職を兼務している。情報関係では、数学科の Prof.A.Sgarro が新進の若手研究者として活躍しており、もっぱら彼と討論する機会が多かった。また、学生の研究テーマに対し個別に議論することもあった。日本とちがいイタリアでは修士論文が博士課程入学の研究学力レベルの判定に用いられることもあり、そのオリジナリティが厳しく問われる。

いくら自由とはいえ、やはりハンガリーからイタリアに移動したときは内心ほっとしたことを憶えている。何もかもカラフルでぜいたくな感じがした。ポスターや車のデザインも全く違う。もっともクリスマスの直前だったせいかも知れないが。ハンガリーでもそうだったが、先生方は朝9時頃出勤、夕方4時頃にはもう自宅である。1時頃たっぷり時間をかけて昼食をとる習慣がまだ根強く残っているから実働は少ない。通勤ラッシュもないし生活はきはめて優雅に見える。ブダペストには日本人会があり、家族も含め約200人の会員が居るとのことであったが、トリエステではおそらく筆者を除いて日本人は皆無であったにちがいない。空手が盛んで道場もあったが、日本人は居なかった様である。

おわりに

短期とはいえ、4ヶ月余りの外国生活は予想以上に大変であった。計らずも日本のサラリーマンの単身赴任のつらさを身をもって体験した次第である。

ヨーロッパの風土は現代的なビジネス社会の影響を受けながらも、伝統を重んじ、ゆったりとした時間をもった生活パターンを堅持しているようである。また、日本と比較しても決して豊かとは言えない国々で、基礎研究を重視しゆとりある研究環境を保持し続けることが出来るのは、全く羨ましいことである。めまぐるしく変化し、時間に追われる様な日本のビジネス社会で、ごく一部の側面だけでもヨーロッパを見習うべきとの声も多い。筆者は昨今すでに日本流ビジネス社会で雑用に

追われているが。

最後に、今回の訪問に際して本学会の関係者、特に阪大有本先生、静岡大堀部先生には大変お世話になった。厚くお礼申し上げる次第である。

### 奈良シンポジウム回顧

事務局担当 佐藤 正志  
(阪大)

第8回情報理論とその応用シンポジウムは昭和60年12月5日(木)から同7日(土)の3日間にわたって、奈良文化会館と大和山荘の2会場において開催されました。参加者は256名、講演の発表件数は147件(ワークショップ2件を含む)で、過去最高の発表件数でした。今回は大阪大学工学部通信工学科の滑川敏彦教授(現摂南大学工学部電気工学科教授)がシンポジウム実行委員長となられ、神戸大学、神戸商船大学、摂南大学、近畿大学、大阪大学基礎工学部、工学部および松下電器産業(株)中央研究所等の関西在住の方々に実行委員となっていただいで準備が進められました。

シンポジウムは電子通信学会情報理論研究専門委員会とIEEE-ITグループTokyo Chapterとの共催で行なわれ、第1日目は奈良文化会館においてまず午前中に電子通信学会情報理論研究会が聞かれた後、午後からシンポジウムがスタートしました。4つのセッションが並行して進められ、中には会場が満席となったセッションもあり活気あるスタートとなりました。夕方6時頃には、合わせて12のセッションも無事終了し、参加者の方々は連絡バスで、東大寺近くの大和山荘へと移動し始めました。ちょうどその頃、実行委員会事務局に、大阪空港から「情報理論とその応用シンポジウムに出席予定のアメリカからの外国人研究者が到着したのだが、ビザがないため、このままでは入国させることは出来ない」という連絡が入りました。そこで滑川実行委員長と、Registration Chairmanの阪大基礎工学部の嵩忠雄教授が急きょ対応策を相談され、滑川委員長が身元引き受け人になるという条件で入国を許可してもらえるように、連絡をとることになりました。このような両

先生の御尽力のおかげで、当の D.Champ 氏 (Center for Mathematics and Computer Science、アムステルダム、オランダ) は夜 10 時近くになって、無事大和山荘入りすることが出来ました。Champ 氏はオランダ在住ですので、直接、日本を訪れる際にはビザが不要なのですが、今回はアメリカ経由で来日したので、問題が生じたということのようでした。

さて、大広間では阪大・工・通信の笠原正雄助教授の司会で懇親会が開かれ、カリフォルニア大学の J.K.Wolf 先生を始め滑川実行委員長、次回幹事校の長岡技術科学大学の丸林元教授等の諸先生方の楽しいスピーチが続き、終始和やかな雰囲気で行進が進められました。

2 日目は午前 9 時から夕方 6 時 20 分まで、都合 20 のセッションが開かれ、さらに夕食後には前述のチャウム氏とバセティック女史がワークショップとしてそれぞれ情報セキュリティとたたみ込み符号について講演され、予定時間を大幅に超過して夜 11 時近くまで熱心な討論が続けられました。

3 日目は一般講演はなく、すべて特別講演が行なわれ、東京大学の伊理正夫教授の「計算幾何学」、カリフォルニア大学 Wolf 教授の「Combined Modulation/Coding System」およびハワイ大学 Lin 教授の「Cascade Coding Schemes for Error Control in Satellite and Space Communications」という新しい分野の 3 件の講演が行なわれました。

このように、3 日開にわたって、古い文化の都、奈良において、現代の最先端の研究分野である情報理論とその応用に関するシンポジウムが開かれ、盛会裡に終了し、翌年新潟県で開催される第 9 回シンポジウムでの再会を約して散会となりました。

### 1986 符号理論とその応用ワークショップ

参加御案内  
主催 情報理論とその応用学会  
座長 今井秀樹 (横浜国大)  
会期 昭和 62 年 8 月 25 日 (月) 10:00 ~  
26 日 (火) 12:00  
合同開催 1986 暗号と情報セキュリティー  
ワークショップ (8 月 26 日 (火)  
15:00 ~ 27 日 (水) 18:00 同会場)

会場 横浜逓信会館 (宿泊可)  
Phone 045-681-4111 (代)  
〒231 横浜市中区山下町 50-1

交通 関内駅より徒歩 10 分、桜木町より  
車で 5 分、横浜駅よりバス 15 分

#### 講演主題

- (1) Goppa 符号とその復号法その 1  
杉山康夫 (摂南大)
- (2) Goppa 符号とその復号法その 2  
今村恭巳 (佐賀大)
- (3) 有限体でのべき乗演算  
中村勝洋 (日電)
- (4) 2 重符号化方式とその応用  
山田隆弘 (宇宙研)
- (5) BCH 符号と RS 符号の符号化復号 LSI  
山岸篤弘 (三菱)
- (6) 符号理論とオーディオ  
鈴木隆敏 (赤井)
- (7) 符号理論と衛星通信  
平田康夫 (KDD)
- (8) 符号理論と計算機  
藤原英二 (NTT)
- (9) 符号理論と暗号系  
田中初一 (神戸大)
- (10) 擬似雑音符号系列とその応用  
河野隆二 (東洋大)

参加費 1 万円程度 (但し、合同開催の  
1986 年暗号と情報セキュリティーワ  
ークショップの参加費を含む。)  
参加 本ワークショップのみ又は両ワー  
申し込み ショップへの参加を御希望方は、  
8 月 10 日までに下記までお申し込み  
ください。なお、宿泊を御希望の  
方は、下記の連絡先までお問い合わせ  
下さい。

連絡先 両ワークショップ合同の懇親会を  
8 月 26 日 12:30 ~ 14:30 に催しますの  
で、是非御参加下さい。  
東洋大学工学部電気工学科  
河野隆二  
Phone 0492-31-1211  
EX. 320, 332, 335  
FAX 0492-33-1855

「暗号と情報セキュリティーワークショップ」

に関するお問い合わせは下記までお願い致します。

横浜国立大学工学部電子情報工学科  
松本 勉  
Phone 045-335-1451 Ex.2898,2904

シンポジウム計画のお知らせ

評議員 丸林 元  
(第9回情報理論とその応用  
シンポジウム実行委員会・  
委員長,長岡技科大)

昨年12月に開催されました第8回シンポジウムにおいて、第9回シンポジウムを新潟県で開催することが決定され、私が責任者に指名されました。それ以来新潟県の候補地について会場条件、ホテル側の熱意、交通、料金観光的魅力、天候条件等の観点から比較検討して参りました結果、妙高高原赤倉のホテル太閤が最適であるという結論になり、去る4月7日の理事会に諮り御了承を得ました。10月下旬の赤倉は紅葉シーズンでもあり、又、ホテルも眺望がよく、高原の気分を満喫して頂けるものと思っております。その後5月8日に第一回目のシンポジウム実行委員会を開催し、遺漏なきを期して準備を進めております。実行委員会のメンバーは次の通りです。

委員長	丸林 元	長岡技科大電気系
庶務	萩原春生※ 太刀川伸一	長岡技科大電気系 長岡技科大電気系
会計	太刀川伸一	長岡技科大電気系
会場	穂苅治英	長岡技科大電気系
企画	韓 太舜 平沢茂一※ 辻井重男	専修大情報管理 早大工業経営学 東工大電気電子
渉外	坂庭好一※ 原島 博	東工大電気電子 東大電気
編集・出版	小野定康※ 今井秀樹	NTT通信網第一研 横浜国大電子情報

各担当代表者

第9回シンポジウムの開催要項は関係各方面を通じて既に配布されていることと思致します。質の高い論文を多数応募されることを期待しております。

役員・事務局の役割分担

庶務

1. 組織管理
2. 会議の開催  
(計画・通知・進行・議事録)
3. 諸連絡
4. その他

会計

1. 予算案の作成
2. 決算案の作成
3. 会費徴収
4. 経費支払い
5. その他金銭に関する事

編集

1. ニュース・レターの計画・編集・印刷・発送
2. その他編集・出版に関する事

企画

1. シンポジウム実行委員会に対する学会側窓口
2. 講演会の計画・依頼・実行
3. 講習会の計画・依頼・実行
4. 研究集会の計画・実行  
(もしくは実行の委託)
5. その他集会・イベントに関する事

無任所

(渉外)

1. マスコミ、企業・官公庁・大学、他学会との対応
2. 学会のPR(入会申込みピラ作成・配布、企業へのPR等)
3. IT News Letter との対応  
(開催案内掲載依頼等)
4. 学術会議への登録に関する事  
(計画・書類手続等)
5. 広告に関する事  
(企業への依頼および事務手続等)
6. その他対団体に関する事

(会則)

1. 会則・細則に関する事
2. 著作権・特許権・プライオリティに関する事
3. その他規則・権利に関する事

(その他)

1. 特別任務
2. 地区連絡

事務局

1. 各種問い合わせ窓口
2. 予稿集発売・発送  
(国内外、シンポジウム後)
3. 会員名簿の作成・更新・印刷・配布
4. 宛先シール作成・更新
5. その他対個人に関すること

役員紹介

	氏名	所属
顧問	滝保夫 重井芳治	東京理科大 東北大
会長	滑川敏彦	撰南大
副会長	堀内和夫 嵩忠雄	早大 阪大
理事	無任所	辻井重男
	庶務	有本卓 笠原正雄
	会計	平沢茂一 原島博
	編集	杉山康夫 田崎三郎
	企画	韓太舜 今井秀樹
		小倉久直
		小倉久直
監事	古賀利郎 岩垂好裕	九州大 日本電気
事務局	佐藤正志	阪大
評議員	秋山 稔	東大
	稲垣康善	名大
	佐藤 洋	電通大
	下村尚久	東芝
	畑 雅恭	名工大
	藤原謙一	三菱
	丸林 元 森 真作	長岡技科大 慶大
幹事	無任所	坂庭好一
	庶務	橋本 猛 田中初一
	会計	大石進一
	編集	中川正雄 山村三朗
	企画	山田芳郎 川端 勉
		河野隆二
		小林欣吾

ニューズレター原稿募集

次号は、夏秋合併号として 10 月上旬までに発行の予定です。研究その他に関する視点、感想などの多様な原稿を募集いたします。フロッピー・ディスクによる投稿も大いに歓迎いたします。この場合は、編集の都合上、一太郎による文書ファイルか MS-DOS の標準テキスト・ファイル(5'2HD)でお願いいたします。フロッピー・ディスクは、お返しします。なお、次号のニューズレターに関するお問い合わせは下記送付先をお願いいたします。

締切 8月31日  
送付先 川崎市多摩区東三田 2-2-1(〒211)  
専修大学情報管理学科  
韓 太舜(編集理事)  
TEL 044(911)7131(内)265

編集後記

学会発足後のニューズレター第一号をようやくお手元に届けられるまでに辿りつきました。何しろ、これまでは原稿督促を受けることはあっても自分からやったことのない立場であっただけに、原稿というものはヤイのヤイのとせつついてなんとか集めることができるものだということを始めて知りました。このことを今後は大いに心して臨みたいと思っておりますので、よろしくご協力の程下さい。

次回からの編集・発行は、韓先生と担当を交互にしてやって行く予定ですが、情報過多の時代ですから、できるだけ読んで頂けるものを作ることをモットーにして行きたいと考えております。

なお、このニューズレターについての御意見またはお問い合わせは下記までお願いいたします。

松山市文京町 3 番 (〒790)  
愛媛大学工学部電子工学科  
田崎 三郎(編集理事)  
0899-24-7111 (内) 3743

情報理論とその応用学会事務局  
吹田市山田丘 2-1 (〒565)  
大阪大学工学部通信工学科  
佐藤 正志 06-877-5111